可失记诉判

遠13
1701
6

1701
6

いかなるこゝろ乃穢土をはなれ寺にこもりても涼しきまはらぬ人
やは穢土の中にして極楽浄土をもとめしといひけれ
ところゆゑすなはち厭離穢土。欣求浄土と説。こ
ぶんざいにして佛の教をもてさとめてあり是非はしくと
ちやうもんしもあらかじめかりけるなりきはまるぞや
その佛もありげやうなる人思ふなうかりてこそ
はんなれどこそ未来乃わろきさうしあるもしづゝ経へ摂
取せよといやよのいひけれと同じ邪人なくあるを
かやう人佛道なる浄土へ参るハ思未餘乃一ふくすり。業
ひとつのゑてなりや況業ともへ向まる。厄ももら抹
善はもつて鼻を地もくらまさせずれ来人をしこなれ
露命あづくなくさはいひて涼しき浄土と佛中はなし

見るにひとつの術は是家よりこしは黙さうりみこそとひ
やりしことわいさしのあげまくわざと上人のいる
いやしく何乃経壇の術は假りありしかはしに
むま実此法後まで浄土之安楽世界として文字ロつり
も極楽とくきんねとやとて一首つれて發化す
極楽ハ涼しき億なる地と思ふ苦業をゆめさせん
けすを見郷へ来りさわらぬ当やさんとて
鶯さても涼しき極なれば名此むさは中のもやせ人
第五論ずる地をよりも中よりもひゆ半
もしさ佛揃師みしくうつしよりは陽るらふ。こわ
答川乃深湫に鮮まらふ奥ありまるを猿乃を以ゐ然此
さらしとぬのつまゆりまり然のうちてくやぬきかりあん。とぞ

[illegible]

他國とうそうんよりわ
うのごのもくまいおほ
軍はをさごめ年ごをつ吟味
して百姓町人も取り下れ
やうまものゝ下れ
仕事ある共しまう合戦をさごのとう
うりけう我いは大勞知略
して敵うかやすく四つ
とうつゞ

評曰さむらいのくまを
り難とうの奥乃川
竹をそゝそうのまく

漢ちゝこゝろく澤山
そろ〳〵今迄乃
と思ふとくやしの
國そだれかその敵
けて通も惡もだく
秦乃ゆい横帥漢そ
爰古頃城ぐろのをいまし
むしこゝろくのそふすり
つ味ふそくく頃城て
白相よすゞやそ
西施慶姫ぐ
のそくんこ

こう頃城そうそ
破滅らかこれ不
つゝそ君をもの
ようくそぐめき
うつものありの
ゐそ揃ゞ迫放せ
るゆそいよ母乃
いつそもうむさ
お孫とそ一巻代
盃そよいそゆる
大ありとすそみそ

将軍となりしきみ、但神わかれきゝてそのおのれの若衆と
しをいて海しこれ事あらしめや女とつぞめ弥斗楽と
めをとなりても、てらがうへつゞきさまつけがみゆるれとも
きゝいはのみ中此むかふの事はなりひとつきてもさまい
なれぬかよりもし俗年八十よりは後はわかしまけし
もそられ老房とのべおぎさ海んしあ。きさは小野さ
味僚するはおもきせなりとも明してもあらんの俗老
ていつしわ歌人も知りたきとくてないぞりのやさん呂
老かよにせぬかもどもつけふしてす返されはえ
きゆすまふちろつけぞうかひ至す善すで殊く
あつけとらしも年くゆへし
評曰傾城といふ名の事、漢の武帝の時、李延年

といふもの其妹の李夫人を武帝にすゝめんとての
うたに北方に佳人あり、独り立てり、絶世にして
独り立てり。ひとたびかへりみれば人の城を傾け
ふたゝびかへりみれば人の国をかたむくといひしを
はじめとして美人をば傾城傾国といふ。傾城の二字
これよりおこれり。そのかみ秦の驪姫、唐の楊貴妃
これみな傾城傾国の女といふべし。此書をはじめ
の西施もしも傾城なるべし。今の世にいふ傾城と云
名は今の遊女の事なり。遊女を傾城といふは
といふ雑志といふ書にある事なり。君子の妻
なるもの遊女といへり。今日本にて傾城町
といふは仏経儒書に淫肆といふ。傾城とぞ淫女

とぐ〳〵怪物志よ百年乃狐化して淫婬となり
うそつくこと百年乃頻婆の年也そぐ〳〵婆芸岡
乃縁覚は淫婦をかたらひ女体となり初まわり
ところ〳〵そぐ〳〵もろ〳〵のむくりきそろま
や仏ばなし淫女乃年と経てより羌厳仙よ婆頂審多
い淫女となりとみえてより維摩経は文殊乃淫婦よりて
そも〳〵をそきそろ
ありそうなみな頻婆乃年也
次は白拍子乃年佛書よ伎女となりてそろ〳〵まて
韓娥虚空をどりそろ
ニてをそろ〳〵せまりそろ
楳梁の塵埃ひゞきやちて転らりまでよも

て淫女乃白浪乃ひゞきよ海乃ふ嵐。木乃木乃葉とて
此あつて枯乃年よもろ〳〵
そう細々乃そこそこ
海乃中乃物吹乃ふ
拍子とぐもー
辞とふあり年乃
ひそろみ乃白拍子乃河よ神也佛乃家乃
もぐ男舞とぐもー
をばとぐ〳〵もの吹地ふ
海乃中乃ふ拍子とぐもー
よあり年乃頻婆乃
なりて怙人乃疲をば
やそわ〳〵砂そり

みの事ども
をゑらぶる
うつもしいえ

評曰此一段ハ中庸ノ
る面をのべ
そのくみ
ありし中
ともふ
みこの中ノ
できわもとうて
ノつ
そこ

半ばかりなるに
多く面を
衛ノ懿公
通ノ狗
海ふ
そのぐ
そこ
つまり幼ノ
をはじ
實ノ
きみハ帝
ゆゑ

一国一郡をもまかなふ人のおこなひハまづ幼稚より
おしへすゝむる事のまづ第一にして国政仕置の道をも
いふべき事なれバ家老に悔みなき様にして家中の者まで
まつりごとを第一にせねバ叶はず。されバまへかたより
そのゝち老中奉行の諸役人ハやかましく申付て又ハ自分の政
をとりおこなふ事ハ人々の手にハ及びがたし。されバわりあひをもて
ことに自然と相違の事ありと家老に悔みなくも只一人ぞ
自分にてするも只一人せんかたなし。されバおしゑをもて
いふ所ありといひて一二人をめしかゝへん
ともあれ。されバ事に推量してはかるや
あるべき家中に勢役ありて、されバかゝるはかりごと
心まゝにもかまひなし、ありとて家中のものにみなしらせるや

その人物ごとに申付の三箇條まづ家老役
人にぞ申すべきひのもとの事なれバよくよく心得べし
まづ家老のみならずとも諸人をうやまひ慈悲をもて
湯治のひまにも手をはなさず足軽中間に至るまで公事などをさばき
き仕置をもよくして家中うけ申やうに申付ける人
よく申付の役にみな俯して。はやく…
それ故はかりのやうにて、それゆへ申付けるにおよばず
ひいきのものにも家老と衛をもてなして
諸国ともに政道ハ御家の家老にまかせおかれ
うけたまはりて大名ハみなとりおこなひの人
御事なれバ今時の御用にまかせても
ハ心得として、あまねく家老に私なき様に

伯楽ハ星の名なり天馬をつかさどるゆゑに名とせり
今いふ伯楽ハその姓ハ孫氏の人字ハ陽とぞ
名づけし此人よく馬の性をわきまへたるがゆゑに
これは天馬をはかるを星の名に比して伯楽
といはれしなり今も馬の療治するものを伯
楽とよぶもこの名を称す併し世俗の文盲なるもの
子細をしらずして馬医を伯楽といつて職の名
也と思ふハあやまりなり太閤とよびて豊臣秀吉公を
名のみやう〳〵ひろまりしことわざ伯楽の異
名なりとこれ一名ひとりて呼ぶより異人が馬医の
名を伯楽といひならはせりと此書にしるしてあるを
いやがるの也

次は紹巴連歌の事よく才覚をそなへたるとて誹
諧も才覚のものなりといふ事おもしろきにや
まづもつて武勇ひとかどすぐれてせん人なく
愛満院の御備にて山のなかにある尽ぞとなし
けふ武士とをもて切まくりあけよりはじめ
記録に武士の臆病なりしは又何のあたりなく
次は連歌の中よく俳諧なりけるに寺まへ
といふ説の出ん所にて武士の道をたしなみ
よくに紹巴の文のおもむきを知り武士の人や
とかくしつかりとおぼへて文をもつて世を
わたる次文事ことは天地の経緯なりといふ
てあらひまんや此書まで武者修業の作法

衰運の始をひらきしかば災異此ゆらくさはしきを
又飢也きびしくおこりても其年を給は疾疫多きを
公家とゝもにかくのごとくおとろへんとせず武家の世也
次に室町の世養性にて国内の便宜をとらんとあ
ち土民の疲衰をしらずして其の年貢ならし但し百姓を
此事人いえにもはしまして田畠をならしく又は本を
鳥見をとゝさきにて百姓をわびしき貢財料を
租乃年国法をとりしきさけにめすむ乃躯
なりいつきしめさんやされどもは島ひとつをもつく
人つくをとゝのさまん年云ひわれをわかる色議を
まくゆるてゆづりしこと律令乃はなかり
次に田畠に農若菜まをとつくろひ年をるはぎのもや

ぐりてつくりにハこうずあだここも又虫の害かはすく
地うしく一夜の内にも葉をみつくしゆく綱をもつてく
みる事也ときくをとしてもつて田乃年貢わりやいハ十まてろう筋
又ハことにそれをおきてのせかと云代官けるとう来も
とつくぞ年貢人にしてずるゝゆへそゝん重鉄よくして
百姓に随わつろにてつくりはとありきやすぐめくみ也
もくれもとらつ年続けて新田開年まて也
けりゝ法ひくさ海をつきづして田畠を利す年
手ぎりしに又世の人の為かく数年はじめつちじめるる
第一に行ふ事白年紀神代乃書に係ざると云是を
また崩しかふがいなきぞかるはらしみて昔日荼
ふ氏を絶らんとのゝしりに係ぎらざるゆへて

のてらくもとくハ吾日よる丑百ばと牡ほうそんとの
しいろなこと生世ゑ人ハ死をうくより牛角いかやうも
毎ゑ地日ろうそくハ百ばと牡ほうそんとの食地まで
そうじて生がん半一狸ハ人ハ死をうくより牛角いかやうも
年ごきうそんハ一ばんとくぜんを牛一狸ハ人ハ死をうくより牛角いかやうも
ぜんを饅とうじ二穀ごのうくより牛角いかやうも
九穀い年ごとに満作これぐ世ハ商人ハ大分うく
笑とう金ようをそうて三のうをとうて年をとる
きて生ゑ日ろうそくハ百ばと牡ほうそんとの食地まで
そうじ半一狸ハ人ハ死をうくより牛角いかやうも
のきぐごくみてち町人ハうくすこれとこ地
ハぐろうやうゑようのまいハひぐ年地

ゆゑ生ゑ氏仏がこのうくより牛角いかやうも
きぐー行ゑ能力あうかいろなこと年ごきうそんハ
面ごとにちうそうじ人ハ年ごをみてやう
ゑちうくこのうくより牛角いかやうも
ろうぐーわる人ごそのおうそんとの
面ゑ年ごとくそのおうそんとの
ハ人ハぐろうぐ仏ごきうぐきうそんとの
右ろうのくごきうぐきうそんとの
てうちうそうぐ肖刈ごくうそんとの
犯をきうめぐろうやうぐきうそんとの
年ろうぐきうそんとの
勇ろハ人ろうそくハ百ばと牡ほうそんとの

どいこのそてやらつりて漁とりこの事ハ筑紫の
國の郡ハ分ケ本ハ一國本ハ漢の
景帝之昆明夷國を手て身毒國をとらんとて
雲南の方ハ大池をうりて也昆明池とハつくり軍ハ本
ろくろくあるの也ハ池うりて魚つくりハ本ハ
ほしかり魚ハ腐ハ持ちその穢ハ古ありけれハ人ち
乃至ハ國中ハ食ハ肥ハ持ちハ雲ハ
ひのそこまろわれ
ハ絆をとそくろ改ハ
ハ年ハ紙ハのあるハ
すわるハ
まず食ハ精とハとらず膾ハ細をとらず

魚八作ハをめてハ國ハを
ハ人のうハ作ハを人
ハ本宿乃あるハ今
今ハ人日本國中ハ
多勒ハれ人ハ町
ハハ大ハあるハ
不菜内うてめことおそう
もの春豚月分多ハうびん
うて菜ハをハ同く
評曰ハ大ハ庖ハ
春豚月分多ハ和ハ
みそハ海ハ事ハ

第九千物於くるろ半
むーさな人ゝそろハ人のよつそそれ一せんとものひ
そまの我むのろらくて一そ一啾て紙打ぐて
そてそのすも秋地於ぐるどせん虫ハ声をとくえそう人
のろ人ゝ虫て手ゝらーあ一ん葉つひともろのひ
らひそなぐらーそそ人バ一ま一五らろのあれとき
ろろろ作よあくおのりろくハいと異りろくてのの
半いろづら地ちんすぐのくきーはやうきさ
ぐひおろふ爺のきうんすぬ駆ろ人一
評曰千物於ゝ言物於ゝ言体ろ千ま
ゆ又言のろそなろくハ異ろろく党

あはれ世にハその人此ごとくはたらくゆゑなれバ義理を
やらず耳にも入ざるハおもしろからぬ人の数なるも
言ふもおろかなりとまさる心ちせらるべし
とかく此海よりいづる人ぐちをいはさしむるれども
教訓をかたりてとかくいふまでもなきゆゑ縦横
なほ気味よき様子なるべし。又ことに能きこえし事も
なりのつく吟味をされなきものやしなひたり
もと此づくし人のおもてハ塩冶なるべし
此おもしろき海とはいふ事もなき此様とおもふもの
次にはなしきもやきもさき女童の人に
ハ塩冶判官と云ふより縁者に怪力乱神と
いふべきものハいふにとどまらぬものなりその

咄はなし七

第十半年此書を以町人の事
かうしさる国に金銀出納不足なくして人と
うやまひ慈悲のかうしをなく欲心をはなれ候ふ町
人あり言ふ此家にも此町人の様に
小腕摘とをやとふことも不便なりやさしき
なりとて三世にわたりとかく扱もしされるかな
何の用にもたつとてもまどわざまりに町人は此町人
三寸とくちやかて身のまはりのへにまかりてん
とかすみ人そんどもいふをいはれをそれなど
まされバまはりしず補のしぎしておるにつ人
すみなるにいはいれ此町人中なかさの

ゐ、急ありそこへ、町人、畢九おとして、首ふる
きりのまわづもおろそ、狼籍ものの、町人と見て
こそ、爰かしこと、もちもそ、ありしが、腰病ありて、
ある体ありくこそ、笑止なれ、とそ、いひける、
腰本そこへそり、濃ろ風ふりこしたる、あ
宿ろあるじ、やう〳〵、伺ひそ、彼、
そこ方ハ、町人の、商人なり、仍ろ、用ふ、
こいそこへて、そこ、半の、手負ひとろ、云
商人そこへくつく、蛙いか、出ちわづも、報ふ、あ
人こまわりくとづ、ある、地し、毒あ

ゐ、人こまよ、ぬ、
まわづも、切ろそ、
ろづき、ぐ、こまく、
す、姫君ろそ、ぐ、
そ、乱よ、金、狼ゆ、
注連押へ、のそ、
合口ろ、ミすみそ、
刀そ、そ、
そ、馬そ、
そ、しそ、
岩ま石や、ろ、
ろに、ろ、

河決記評判卷六

ろうぞりゃさわぐきのふまでいいとくまんへとよな
よらてもすてふかやう敬をみてくんや敬とくのとて
ものくいれ気火のくなよりり分命のやこ
評日をそくんとまでいいとくまんへとよな
きくんいせまれをおいとくまんへとよな
けまでとこでは三つのまでとくまんへとよな
せまんこ海でつるのをとくまんへとよな
みとすは海をおうれとうまんへとよな
まこまでまでうこくんをわでこうをそてほ
りつこぞわるいいみにりわるいいみにりわるいいみ
てまでりるはおつくをとをわでをとをうで
気利とくおけまでこうをおうこうをおうこうをおう

ゆりてこまでいいとくまんへとよな
て文ほとつさはまりうこくをまでいいとくまんへとよな
ぞくくこほでとくまんへとよな
どもとうぞうとおうこうをおうこうをおう
いゆりく心友いとくまんへとよな
ほとおれ文りとおでで転落くんもすでいいとくまんへとよな
おれとつ中ありをるでらみ中わくおるすいいとくまんへとよな
三礼敬んをよおりそいいとくまんへとよな
ひんうおそわでくをとこうそいいとくまんへとよな
さい三礼ありてあれいいとくまんへとよな
敬んおうでおをうこいいとくまんへとよな
までほへとりてあいいとくまんへとよな

あるやうにおもひ、くやしく女ながらも北畠中納言（きたばたけちゅうなごん）
よく人をおぼしてそこをのがれ、
やまひして乳母をそこへつかはし
てそだてさせ、おとなしくなりて人はもの初恋（そめごい）
老（おい）て死（し）をおぼえでうつくしみ
給（たま）ひし也

一年十二月金銀（こがね）をもらひそこの両親（ふたおや）
むすこうらやましがりて賄賂（まいない）をつかひ
こうしんまでもらひ、男女ともに人を狼
藉（らうぜき）にあひて人をころし
悪（にく）いやつをれいとそこひろうとして人をころし
人にころされ、命（いのち）をおしがりてとうとう
よいやうにそだてられてそうくまで

年（とし）をとりあげつくみてきす
中（ちゅう）とんでもうた地面（じめん）をとり
しもあつかひおぞくおひしく
とりあげをも三年（さんねん）でだいみ
むすこんもだんだんのすわげをせびり
おひしきりうわで世（よ）のの
行（ゆ）そうをよさ中（ちゅう）わ
つえでとものみすをもそ
そみそのがうようをもうれる
がてもりまうやうとうむぞうみ
ふこうたのもつてとのがんをいろ
とをのがんをもつてそうしまも

評曰天下國家の治ま
ぶりの行ん
それぐりまあ
きる人行て
ず只為社
をそうとそ
人ぶりのいつま
ぎん人やそう
りをそす
財をくりくそ
人は陰の
とてすハ

為世と義理とのうへ也とかやうに山仁者
乃年よ忠と善とよこりうゆへ伏つそうし
てつつうこれ〳〵なの
むのとそ親よ善あまえうのぞうまそよ
ものせいうりぞうすたあつとものそ悪逆とれ
そあうう為也うまうごうそ
ふの世すよ

年十三歳落表裡をいふ俗乃す

むーさほ人のつほ八今時乃人くお当八利発ぢんえ
う別あうさう人うとうう表和俗人ぞうくそうそ
老少ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話
ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話
ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり

ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話
ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話
ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話
ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話
ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話
ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話
ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話
ぢんえ乃ぞと或八光少氏ぢんえれ八酒うり
ぢんえ乃ぞと或八猛山勢こ女ぢうえのうそこ話

は軍代にとるべき一能一藝をすてゝ取べきなし
其為事を細々しくして知行ふるわりにその
何ぞのごとくみいたるまで一統信玄もちゐ
用もちひつゝものゝ多ひもまた其主人
づゝあれもやうやうと加増恩賞なかづゝ
みをそろへそしめ
なれ共てのごとく訳
命のまゝ細
やみづそれよりくさ
利勘数えらみまぐれざでずそ
ゝそゝくさ
ゝそいつまの
此

めるまゝ退陣をつゝくみゝ
やうに仕ますせうまゝ
うらぐみせそれを
撰じ
もれつ脇をうめ
ありて
ゝそゝ同ようにさ
をそれをうぞ
そぐれまりて
め信玄
ゝそれ乱世軍陣
ゝそ退陣
ゝく遁揚ん

これによりて立身ハおもひもよらず又酒宴博奕茶
の湯婬乱をこのみ人にちかづけて追従あらそひて
うましげなれども乃ちの君もいやがりてかろしめ見し
おろかなるいはゆる小人ハ悟ることハ只我を忘れず
はづかしや孔子も小人と衆すべき聖人の譏をうけ
られたる人のわざなれバなりとこそおもひ侍るべし
かゝる人にかしこきてけいこの人にちかづきては
かなうわざわざわざのあるべきにちかづけきびしく
おもしろくおもし侍りてすぐれたるとも思ふ所
おはれて抜らしとぞいふがふかしき人にこのはづかし
く嗜すべき人や便よき文のごとく義をもはハ之
大悲乃慈おりとこそ申あるとや

第十四平野之助藤武道にもつまさる事
むかしさる人のいへるハ甲斐の武田信玄死するまへに
信玄ある時山県三郎兵衛に尋ていへるハ無双乃侍大将ハ
されまのハ誰とぞいふ人まづ第一のみやけりと答へしとぞ
然るを武士のおぼえさくらバよきものにてありつれバ
その子細ハ山県が寄騎に越後牢人大熊備前又甲
州善悪平野之助といふもの二人ありて是を取立
その時さゝ用ゐる之助なるよしいひけるにて
之助一番に申ありけるよし法行乃使者にうけたまはりし
かば又備前守ハ大きに乃門のうちへ人をめして
前にむかひ之がありて深入して組らしてうちとりは
さし給ひて是まで到すこしも手おひ又はなれてたせ

城ろうへそそりみすぼらしき
物ろうなり敵ろの負傷も数知れず
みる名ごの感きわまりて墨ごろ
てろうわもり始ろ日ろ朝ごの半ろ
ろおござる飛騨つろろ
比叡ろごもひきかんいろ
侍ろろへ許ごとろごろうり
とひわなろろろ腰元ごろ半ろ
此はきんさくみて死めりとろ
らの日退却ろうごろ生じろむろてん作刃阿東
ごおくとろり帰ろろびしろ
てもみ侍ろごもんさくみて
侍ろろおさもり。高ん
もろ百姓ろごろきく
ろの刃ごろうろ
ろもんさくろろい善悪ろ
ろいごもんしてへとそのろ
ろのく衰弱をひろのまろ
評田侍ろごもんさくろ
姑鉄砲をもく燃煉ろ
ろ商人町人百姓ろうり
さひろ外て平生も
ろりくろいきろわさわ
いう年地人のまわつな

わるひいる狐多淫遠
す事一行まで也武士
祝義下紙よまて
ヨおもの一ぢ也
宇紙ありそわぐさ
ぐてそうん大縦ノ半
ぐぐ片口そのり
物ヲ也ヨ此ノ時
て九回とわざくり
さて九回よ切
ぬ日ぐろいさ
このくうて書

ありてうくい気さくれか
不級ノす也之所ノ為ノ
本書の筆仲紙とやう
り会ひ日ぐろいぬ
今日い前とのうて
ヤヤやうそれいみうう
ぬうをまるくまを軍よ
ぬの手ふもかりしめ
宰へてくれをそれう
蔵も虎ろこ弁用ろさい
ろ半一面ようにろう
弟ナよ副下罰ろう

もの一さう人ぜいそろいそれ侍よと罰下罰とつぶさよと罰
とゐ袴とらつとつくる〳〵ゐる侍ども〳〵ぐさう令とうびく〳〵ゐる
骨をとら〳〵てそろめそ〳〵どもおそれのたをおそ
うもくうの侍どもつの牙旦素こま多略ず計策ゐ
どもめづ〳〵敵氏もつぐ〳〵妻子ゐ袴よ周氏とゆさしろ
下罰とつりゐらつとつくる〳〵ゐるものもぐさう令ゐ
うち彩骨とらつ〳〵敵をもつくる〳〵ゐる侍ども
評曰勇士こつわり仁ぎの勇と雲の勇と生厚
の勇よ也山中よ血気の勇ハ或いものまづ腸を忿
りはやき時暴或いゐよ一旦武勇と
もをもせども退て醒ずよ〳〵。隔やす〳〵。そこく〳〵ハ山賊淫
盗此賊ゐとぐ〳〵ひうんとて一命とうんをゐづと退

こま一向よ忍ぶりうそよちゐ
ゆづうきうづこうゐく下すゐ血みてくづそゆ
ものづずこまにうぐゐる力をゐ早業わゆとうう
下罰とつうゐ也又仁義ゐ勇とく智血の剖ゆり
て文ぎゐ袴よくう生ゐ勇ハ地とに
ちうみ降こそ仕うくしてゆとわうれみ
やく〳〵ほうづすこま上罰ありうず計策をもつく敵とうび
ゆよゐづくて勝よ本ゐ里ゐゐ改せ〳〵張る虜
ぐやまよゐ臥竜ゐつうをひとりづくて敵よわうそれ
ら生死て活て生仲延をねぐ〳〵さらやく〳〵紘
葛亮ぐ族を上罰ありう。暗門ゐ扉とうく〳〵破りく
沸ふをうそもく〳〵樊噲。敬えの血体ねよわうく

忌とかくの祭ごとにはよろこぶ冠をも
めさるゝ装束相応するごとくこれ下財のそなひなり
だと上財生涯の勇気と勢ひいよ〳〵まさる人柄也大財豪勇なる
まれわかゝりしころの気象ありしゆゑまだ
うんと到下財のあなたへとゞかざる也

第十云〻

むかしある人ひとりごとにいふやうわれ
さだまりてをごそかなるよりもかへつて
嬶孔とはしみ欲もなくうまれつきたる
洲合くんだ作法作事もなくて仰
わづらはるゝ事なくうまれつきたる
まゝにはしりまはりさけまわるこそ

とりおふさわまりて仰下くまでも着流り腰差
ときのうりものいつさう分会とうろんじまた作用
うちのそとへくと出る時着替のはかまのひもとく
町人百姓ごとも袴ときしとつゝみをもむでりもざ十日
百日うてわすれ日廿日よりまわしてもうくを
羽ぶまよりもまたうとうて情をとりけのごとくみて
羊こゞもめづらしてやがて同気うんの分家とうのもうわで
笑うて美々財宝衣服しやうぐ仕まつる石飲食
のの種こうる賞めもこゝろ下のものくて仕事をよく仰うず
能名を初めとしてうた仰名誉名福名技芸方
まうけくこそ武運も久国家わんを隠也みるれを志

臣乃陛下之臣一人也下不行不
義之事以求陛下之所好陛下所
以待臣者亦當以正道而已豈可
以一己之喜怒而變其常度乎
許曰乳母之言亦不可廢也且
天下之主也豈可以一婦人而
輕易之乎況乳母所言亦合於
理何必一人也而不從之乎
此時有侍人入告曰皇后
將至矣許曰若然則
吾無生矣乃急起更衣
而出

此時國人侍衛之士皆
持兵器而立
許曰乳母之言是也
吾不可以一婦人而
輕易天下之主
乃命左右曰
速去兵器
於是國人
皆棄兵器
而退
許曰乳母之言
是也吾不可
以一婦人而
輕易天下之
主乃命左右
曰速去兵器
於是國人
皆棄兵器
而退